袖ふれあうも

山中與隆
YAMANAKA TOMOTAKA

―ゆきずりの淡い悲しい恋―

Duo-Yamanka

《袖ふれあうも》
ゆきずりの
淡い悲しい恋

山中與隆

目次

《袖ふれあうも》
―ゆきずりの淡い悲しい恋　1
編者あとがき　54

《袖ふれあうも》―ゆきずりの淡い悲しい恋

山中與隆　作

ホテルとは名ばかりの小さな宿であった。男はこの旅で宿を、立派さよりも安さで選んでいた。なにしろ二〇日間も続く旅なのでそうするしかなかったのである。

男はチェックインして部屋に入るとすぐ、汗と雨でずぶ濡れになった衣類を脱ぎ、シャワーをかぶった。部屋のシャワーからは何時までたってもぬるま湯しか出てこなかったが、夏だからそれでも我慢できた。

ホテルの二、三軒先にコインランドリーがあるのを宿に入る前に見つけていたので、そこで洗濯することにした。

男はできるだけ自然の多い道を選んだ。山を切り開いた国道のバイパスよりは、岬を回る旧道を歩いていた。だからコインランドリーなどというものは、小さいながら市と名のつくここにきて初めて見たような気がした。

半パンとティーシャツという格好で、洗濯物を入れたビニール袋を紙袋に入れて降りて行くと、ロビーのカウンターにいた宿の主人が話しかけてきた。

「お客さんはふくらはぎが太いから、それならいくらでも歩けるね」
と、男の半パンの足を見て言った。男は変なことを誉められたと思ったが、
「いやー、それより腿にしっかり筋肉をつけたいのですよ。すっかり肉が落ちちゃいましてね」
と言った。男は最近娘に、お父さんは腿が細くなったねと言われたのが気になっていたのである。宿の

主人は、まだふくらはぎが太いから大丈夫だと繰り返した。

男は立ち話を打ち切って、コインランドリーに出かけた。ロビーを出るとき、玄関の隅の方に変わった自転車が置いてあった。男は自転車の知識はなかったが、マウンテンバイクというやつか旅行用かだろうと思った。きっとこの宿の息子か誰かの趣味だろうと思った。きちんとした都会のホテルと違って、

ビールの黄色いプラスチックのケースがロビーの隅に積んであったりしているので、その自転車もこのホテルの家族のものだと思ったのである。

コインランドリーまでは、宿から一分もかからなかった。男はこの旅行中、宿につくとすぐその日着ていたものの洗濯をして朝までに乾かすようにしていた。洗濯は、宿で洗濯機を使わせてもらえるところもあるし、洗面所などで手洗いすることもあった。

いずれの場合も、宿のバスタオルでできるだけ水分を取ってから干すようにした。それに比べるとこの日は、その場で乾燥までできるのがありがたい。

コインランドリーには誰もいなかったが、乾燥機が一台回っていた。乾燥機のガラス窓の中では白に混じって黄色やオレンジ色の衣類が踊っていた。しばらくすると時間になったと見えて乾燥機は止まった。それからずいぶん経ってから、その衣類の主ら

しい女がやってきた。女は男に軽く会釈してから自分の洗濯物を取り出し始めた。ジーンズのショートパンツに黄色の無地のティーシャツ、それにゴム草履という格好の女だった。ショートパンツのお尻は形の良い丸みをもち、ティーシャツの胸はほどよくふくらんでいる。顔も腕も足も実に良く日焼けしている。あまり長くない髪を後ろで束ねた顔は、精悍そうだが優しそうでもあった。男は、洗濯物を取り

出す女を見ながら、三十だろうか四十だろうかと想像した。

女は乾燥機から取り出した洗濯物を、持ってきた大きなビニール袋に丸め込んだ。そして男に、

「お先に」

といって出て行った。

コインランドリーの隅の台上には週刊誌やマンガが積み上げてあった。男はそれらをパラッと手にと

って見たが、すぐ止めてただぼんやりと外を見ながら、一時間以上も洗濯に付き合っていた。雨のあがった道路を眺めながら、自分の足だけでずいぶん遠くまでやってきたものだと感慨に浸っているのが快かった。やがて男は出来上がった洗濯物をビニール袋に入れて、ぶらぶらと宿に帰った。

宿の小さなロビーの片隅に置いてあるソファでさ

っきコインランドリーに来た女が、洗濯した物の入ったビニール袋をそばに置いて新聞を読んでいた。男は思わず、

「こんにちは」

と声をかけた。そのときカウンターの中から宿の主人が、

「この人は自転車ですよ」

と男に向かって言った。玄関の隅にあった自転車は

この人のものだったのかと、男は事情をのみこんだ。
そして、
「こちらは広島から歩きでここまで来て、下関の方まで行くそうですよ」
と男のことを女に説明した。
男は紹介されたので女に会釈した。そして女に、
「あなたはどちらからですか」
と尋ねた。女は人懐こい笑顔で、

「下関から。京都まで行くつもりなの。行けたらだけど」

といった。女の飾らない物言いに勇気付けられた男は、いつ出てきて何日かけて京都まで行くつもりかなどと聞いた。女は簡潔な言い方で、質問に答えた。

男は、

「ぼく、これから何か食べに出るつもりなのですが、あなたは食事はどうされるのですか」

と誘うように言った。女はあっさりと、
「あ、じゃあ私もそうしよう」
と言う。男と女は、五分後に再びロビーに出てくることにして、それぞれの部屋にもどった。といってもこの宿の客室は二階にしかなく、お互いの部屋は廊下を挟んで二、三室離れたところであった。
男は洗濯物を部屋に置くとすぐロビーに降りた。女もすぐ降りてきた。二人ともさっきのままのラフ

な服装であった。宿の主人に近所にある食堂を二、三軒聞いて出かけた。この近所にはたいした店は無いらしく、店の主人が教えてくれたのは焼肉屋、すし屋、それに定食やラーメンのある店であった。歩きながらお互いに、主人が教えてくれたうちのどれにするか、アルコールは必要かなど相手の好みを確かめ合った。結局定食屋に行くことにした。そこが一番近かったからである。二人ともアルコールの必

要は無かった。

定食屋では、おばあさんが一人で注文を取り、調理もしているように見えた。ほかにも二組ほど客がいて、彼らが注文したものが出て来るまでにかなり時間がかかっている様子だった。彼らのところに一品運んできたおばあさんに客の一人が、

「おばさん、野菜炒めまだなの。だいぶ前に頼んだ

んだけど」
などと言っている。おばあさんは、
「あー、いまやってますから。もうすぐですよ」
と適当に受け答えしている。すると客は、
「こっちは急いでいないからいつでもいいよ。なんならあっちのおふたりさんのを先にしてあげて」
と言って、今入ってきた男と女の方を顎でしゃくった。

「あっちを先にしろって言っても、まだ注文も訊いちゃいませんからね」
といって、おばあさんは厨房に入っていった。その二人連れの男客はもうだいぶメートルがあがっているようであった。もう一組は、中年の男二人と女一人の三人組で、カウンターのような席でビールを飲みながら大きな声で話していた。どうやら三人は作業現場の仕事からの帰りらしく、話の中身から三人

とも交通整理の係りらしい。道路工事の現場で、旗を持って一方通行の合図をしているあの人たちである。そのような人材を派遣する会社があって、三人は同じ派遣会社に属しているようだ。何処の現場に回されるか、誰とコンビを組むか、どのような工事をしている現場かによって苦労がいろいろあるらしく、都会のサラリーマンが夕方の居酒屋で仕事の憂さを晴らしているのと同じパターンであった。

二人が注文したものが出てくるのにも相当時間がかかった。しかし、話がはずんでいたので、注文が遅いことは二人とも全く気にならなかった。

お互い徒歩と自転車という手段は違っていても、自分の力を頼りに一人で旅をするという共通点で、時間のたつのを忘れて話した。

二人が最も共感しあったのは、何ものにも代えがたい大きな手ごたえであった。乗り物を使っての旅

は、切符を買うことによって行き先までの安楽で速い移動だけを買っているのではなく、安全と確実性を買っているという面が非常に大きい。自分の足で移動するのだから当然、足腰の筋肉には大きな負担であるし、体全体の疲労とも闘わなくてはならない。そのような肉体への影響は直接旅の継続や安全にも影響する。また日差しも雨も風も快適な程度であってくれることは少ない。それらはいずれも直接肉体

を痛めつけ、時には安全を脅かせる。特に雷などのように致命的な危険に晒すものもある。進む距離は、疲れていようが、眠くなろうがとにかく自分が一歩ずつ踏み出した分しかはかどらない。身の回りの必要な物は、すべて自分の身一つに背負わなくてはならない。背負った荷物が肩に与える負担は、足に劣らないくらいきついものがある。自転車の場合荷物は、自転車に取り付けることができるが、それが重

くなるとペダルが重くなるだけでなくバランスがとりにくくなる。だから女の場合も、荷物を三つに分けて自転車の両側とリュックで背負うことにしているのだそうだ。だからリュックの肩が凝るのは同じらしい。

しかし、二人のように自動車道路を旅するとき何よりも緊張を強いられるのは、自動車との離合である。歩道のある広い道では問題ないが、県道はもと

より国道でも歩道の無い道が随所にある。そんなところで、車同士だけならスピードを落とさずに楽に離合できる道路でも、そこを歩行者や自転車が通るとなると事情はまったく違ってくる。この点では自転車は歩行者以上に常に大きな緊張を強いられる。しかし、それらのすべてを克服して夕方宿に着いたときの成就感は何ものにも代えがたい。その一日一日が蓄積されるたびに、成就感は大きくなる。単独

で冒険を続けた植村直巳に比べれば、自分たちのは箱庭の中を歩いているようなものだろうが、それでも彼が出かけていく気持ちがよくわかるということで、二人は意見が一致した。

二人は自分のことについてもお互いに話した。女は三十六才。自転車で知り合った人と大恋愛の末結婚したが、結婚してみると共通点は自転車だけで、それ以外は、女の言葉でいうと、百パーセント価値

観が違っていたのだそうだ。些細なことがどれも喧嘩の原因になり、二人の間はたちまち冷めきってしまった。それでも一応六年間は一緒に暮らしたが、お互い我慢しながらこれからさき生きていくのはばかばかしいと、一年前に協議離婚をした。幸いに子供は無かった。しばらく実家に戻ってぶらぶらしていたが、仕事が見つかり来月から勤めに出ることになる。その前に旅行をしておこうとこの旅に出たの

だと、まるでひとごとのようにあっさりと話した。そして、少し体の調子を崩して医者にかかっていたが、だいぶ良くなったので自分を試すつもりで思い切って旅行に出たのだとも言った。

「若いころは、仲間と一緒に二十四時間連続でペダルをこいだこともあるのよ。たいていは夜もテントか野宿だし」

と言って、だからこの度の旅は宿に泊まりながらの

敬老バージョンだと笑った。
体調が今一つなのは貧血だと言った。歩いていても急にふらっとすることがあって自転車は怖いので乗らないようにしていたのだそうだ。男は、さっきコインランドリーで、この女を精悍な体つきだと見とれていたが、人は見かけに寄らない問題を内に秘めているものだと思った。
男は、自分が五十二才になること、仕事をもった

妻がいること、一人娘はもうかたづいていることなどを話した。そして、

「この旅行はあなたと同じで、次の仕事までの期間にやっておこうと思い立ったのですよ」

といった。男は長年関わった仕事そのものは嫌ではなかったが、人間関係のややこうしさとあまりにも俗物的な上司に嫌気がさして会社を辞めた。友人の紹介で次の勤め口は決まっているが、それが三か月

先からしか始まらないので、その間は失業保険を貰いながらの生活をしている。次の仕事が始まってしまうと旅行など出来そうもないので、この旅を計画したことなどを話した。

ふたりは、徒歩がいいか自転車がいいかと議論もした。女は、自転車は速くも無く遅くもないちょうど良いテンポで、徒歩は遅すぎると主張した。男は徒歩だと、ひとつの風景が長く見られるし、遅いよ

うに見えても、しばらく歩いて振り返ってみるとびっくりするくらい進むものだ。二時間くらい歩いて入り江の向かい側にさっき歩いた岬が少しかすんでいたりするのを見ると感動すると話した。

そうして二時間も定食屋で話し込んだ。別の客たちも酒を飲みながら大声でなにやら喋って居座っていたので、ふたりは気がねなく長居が出来た。

やがて女が、

「わたし、あした早いので」
と区切りをつけた。宿の二階の廊下で、お互いの健闘を願う言葉を交わして別れとなった。女は握手の手を差し出した。男もこれを握り返した。よく日焼けしたその手は予想に反して柔らかかった。二人の視線が合った。それはほんの一瞬だったが、男には時間が止まったかのように感じられた。
部屋に戻った男は、あんなに意気投合しリラック

スして話をしたのに、もう二度と会うことはないという感慨に襲われた。それに、握手をしたときそのまま手を離さないで、同じ部屋に入り込むこともできたとも思った。しかし、その淫らな想いを男は打ち消した。

相手はもっと気品のある女性だから、想像の中でも汚すべきではないと思った。その晩男は、女と話したたくさんのことを思い起こしてなかなか眠りにつ

けなかった。
女の形の良い尻や、話しているとき女が胸を張るたびにむっちりとブラウスを持ち上げている胸元が脳裏にちらついた。やがて自らの手で欲望を処理して、やっと眠りに落ちた。
廊下の向かい側の部屋で女も同じことを考えていた。いまからあの男の部屋をノックしたら入れてくれるだろうか。自分は独り者だからいいが、相手は

女房持ちだ。自分からはノックなど出来ないと思った。でももしあの男がこの部屋をノックしたら入れようと思っていた。そして今にもノックがありそうな気がしたが、なかった。女は、離婚前から習慣になった方法で自らを慰めた。

翌朝八時ごろ男が宿の食堂に降りていくと、宿の主人が朝食を運んできて、

「昨夜はいかがでしたか」
と意味ありげに話しかけてきた。そして、
「あの女の人からことづかりました」
と言いながら小さくたたんだメモ用紙を男に渡した。
それには女の名前と住所が書いてありその下に、
「昨夜は楽しくて、充実した時間を過ごすことができました。ありがとうございます。良い旅を祈っています。お気をつけて」

と万年筆の字で書いてあった。男は感激した。そして自分は彼女に何も言い送らなかったことを後悔した。宿の主人はまだそこにいて、男の様子を見ていた。男は、わかってはいたが主人に、

「あの女の人はもう発ったのですか」

と訊いた。主人はニヤッとして、

「もう一時間も前にお出かけになりましたよ」

と言った。男はここで主人に昨夜のことを説明して

も仕方が無いと思い、弁解がましいことは何も言わなかった。そして、正直のところ主人の想像しているようなことを自分が期待しなかったとはいえないと思った。

その日の行程を終えたとき、男は小さな旅館の食堂で夕食を食べながら、二人はもう一〇〇キロ以上東西に隔たった位置にいるはずだと思った。食堂の

テレビはローカルニュースをやっていた。全国ニュースから切り替わると、見慣れないアナウンサーが写し出されて喋り始める。画面構成も地方によって違っている。男がいま旅行している地方の地名などが出てくるので興味深かった。そのニュースは、今日の午後自転車旅行中の女性が、三隅町の国道九号線で、後ろから来たトラックに巻き込まれて死亡したと伝えていた。そしてトラックに触れてぐにゃぐ

にやになった自転車が写し出された。あのロビーに置いてあった自転車のようだ。女の写真は出なかったが、映像の一部に道の駅の看板が写っていて、男はその場所に見覚えがあった。それは、一昨日男が道の駅で休憩した後、出発して間もなくのところにある中道峠という標識のあるところだ。たしかあの辺りでは道路工事をしていて、海岸線への道を交通整理のおじさんに訊いた場所だということまではっ

きりと思い出した。

ニュースはさらに、路側を走っていた自転車が突然トラックの方に倒れかかってきて、後輪に引っ掛けられてしまった。雨も降っていたので自転車が滑ったのかもしれないという事故当時の状況をトラックの運転手の話として伝えた。そして警察は詳しい事故の原因を調べているとして、画面は他のニュースに移った。

男は箸の手を途中で止めたまま、ニュースの画面にくぎ付けになっていた。男はまるでロウ人形のように動かなかった。頬から血の気が引くのが自分でもわかった。

今日一日どんよりと雲ってはいたが、男は雨には降られなかった。しかし今にも降り出しそうで、男は空を気にしながら歩いた。そう言えば東の方はずいぶん暗かったことを思い出した。真っ黒い雲の中を、

雨に打たれながらペダルを踏んでいる女の姿が男の頭に浮かんだ。若いときから自転車旅行に打ち込んできた彼女が、雨など平気であることはわかっていた。しかしいま男の頭に浮かんだ女の姿には悲壮感があった。トラックの運転手は、滑ってトラックに接触したらしいと言ったが、それは違うと思った。きっと貧血でふらっとして接触したに違いないと思った。

男は部屋に戻って、今朝ホテルの主人から受け取った女の伝言メモを探した。あのメモには、女の名前と電話番号が書いてあったのを思い出したのだ。メモは小さな丸いテーブルの上に、他の小物と一緒に置いてあった。しかし、万年筆で書かれた文字は水に流されたようになって、一文字も読めなくなっていた。一日中胸のポケットに入れたままで歩いていたので、汗で濡れてしまったのである。

男は、翌日山陰線で折居という駅まで行き、中道峠の事故現場を訪ねた。正確な位置がわからなかったし、大きな自動車事故と違って道路上に事故の痕跡は何も見つからなかった。現場付近と思われるあたりの上り車線側を、一キロくらいにわたって男は痕跡を求めて何度も歩いてみた。そして男はついに歩道と車道の境目に、小さな赤いガラス片のようなものが落ちているのを見つけた。近づいてみると、

それは自転車のテールランプの破片に見えた。そのあたりの歩道の縁にこすったような跡がついていた。またよく見ると、破片のあった辺りには、色はよくわからなくなっているが、剥がれ落ちた塗料の粉らしいものも散らばっていた。男は、ここが事故現場に違いないと確信した。そして、赤いガラス片を拾い上げてハンカチに包んだ。それはガラスではなくプラスチックであった。

男はのろのろと歩いて道の駅に行き、自動販売機のコーヒーを買ってベンチに腰を下ろした。コーヒーを開けもせずにボーとして長い時間坐っていた。男は特に何も考えていなかった。ただ男の頭には、断片的に女の笑顔が浮かんでは消えた。

男は急に思い立って、公衆電話から益田のホテルに電話をかけた。電話には例の主人が出た。電話の主が男だとわかると、主人から先に、

「自転車の女の人でしょ。気の毒なことだったね」と言った。男は二、三その事故のことを主人と話した後、女の名前と住所を教えてくれと頼んでみた。男は、ホテルの主人が宿帳の記載事項を電話の相手などに教えることはないだろうことは知っていたが、事情が事情だからあれでもと思ったのである。やはり主人は、渋ったが男が昨日からのことや、主人が渡してくれたメモに名前と電話番号があったのだが、

汗で読めなくなってしまったことなどを言って頼んだ結果、やっと教えてくれた。

男は主人から聞いた女の電話番号に電話した。電話の向こうでは比較的はきはきした調子の声が答えた。男は、その声の調子から手伝いに来ている親戚か何かだろうと思った。男は昔の自転車の仲間だといって、お悔やみを言った後、告別式の場所と時間

を聞き出した。

翌日の午後男は、下関市内の斎場で行われた女の告別式に出た。徒歩旅行の途中のことなので、歩くときの服装のままであった。まわりの黒い集団の中では目立ったが、他に作業服のような若い男もいた。祭壇には、男の頭に焼き付いているあの笑顔の写真が飾ってあった。家族らしい人が並んで、参列の人のお悔やみを受けていた。女の母親らしい人は、女

にそっくりの顔立ちであった。見回すと他にも似た顔が幾つかあった。

男は、告別式には当然出るべきだと思って来たのだが、自分がここに並んでいる遺族たちとは何のかかわりも無いことに思い至った。彼女との行きずりの接点があっただけで、彼女がいなくなった今、ここは男とほとんどなんの関係も無い場所なのだ。男は、両親らしいひとのところに名乗り出て、昨夜偶

然夕食が一緒になって話をした者で、おそらく彼女が最後に話をしたのが自分だと思うと言おうかと思った。しかし、ハンカチを手に泣きつづけている人に、見知らぬ男が急にそんな話をしてもありがたくないだろうと考えて、思いとどまった。

男は、このあと徒歩旅行をどうしようかとぼんやり考えながら、読経の声を聞いていた。

（完）

編者あとがき

著しくＩＴ技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末の Amazon のペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中身から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりましたので、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ（URL:https://www.duoyamanka.com）への投稿の形でも発表していきたいと考えておりま

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1　山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありますが、表示されます。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生れ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思っています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なものなどジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたいと考えています。

ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によってその物語にも音楽にも感動してもらえるような作品を完成させたいと思っています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

＝電子書籍＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた
さまよえる視察団
蒸発の衝動
インテルメッツォ
爆発
妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男
オセロー
テンペスト
定年の晩
魂の三重奏
ロシアンルーレット
ささゆり

才能移転
ある三文作家が見たもの
けんか
袖ふれあうも
ミスターフェイト
峠を越えて嫁入りした女
花火見物
ある小学校教師の敗北

三坂峠　二話
第一話《お蓮・勘兵衛　悲恋の墓》
第二話《緑のトンネルで》
阿弥陀山
ゴーシュの華麗なる転身
ある男の臨終
野の寂しさ
四重奏

親も子も老いて
わしゃ、ただの山ザルじゃ
リョウコからの電話
カルテットのある風景
「オセロ」～手紙版
出来る間に、出来るだけ
なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1　弦楽四重奏団　a

2　弦楽四重奏団　b

3　親和力

4 トリオ・ソナタ
5 不協和音
6 解散
7 音楽のある生活
8 ビオラを弾く生活
9 疑問
10 生きがい
11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

＝既刊のペーパーバック＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集２―ある三文作家がみたもの他

短篇集３―ミスターフェイトほか

袖ふれあうも

2022年7月30日：初版発行
著者：山中與隆
編集発行：山中伶子
表紙素材元：
www.ac-illust.com
タイトル: 自転車レース、ロードレース
作者: ヨギリリさん
イラストのID: 132649
https://www.photo-AC.com
土砂降りの雨
作者: Inushita
写真のID:1679163
© Tomotaka Yamanaka 2022
https://www.duoyamanka.com